

論文の要旨

論文題目 フリーメイソンと錬金術：西洋象徴哲学の系譜
氏名 吉村正和
学位 博士（学術）
授与年月日 平成 15 年 7 月 15 日

平成 10 年に人文書院より出版された『フリーメイソンと錬金術：西洋象徴哲学の系譜』は、本文 7 章および「あとがき」「参考文献」「索引」から構成され、全 270 頁から成る。第 1 章、第 2 章、第 4 章～第 7 章は、平成 3 年から平成 7 年まで個別に発表した論考を集め、平成 7 年から平成 8 年にかけてケンブリッジ大学（連合王国）での文部科学省在外研究中に執筆した第 3 章「錬金術とフリーメイソン」を加えて成ったものである。

全体の主題と目的は、18 世紀後半にヨーロッパ全土に巻き起こったロマン主義の中心理念である詩的想像力の源流を、古代密儀宗教、魔術、錬金術、フリーメイソンなどの系譜に繋がる西洋神秘思想史に求めることにより、ロマン主義的想像力が単に詩的形象に関わる美学的機能だけではなく、人間の精神的な覚醒を促す宗教的救済の機能を併せもつことを検証することにある。

第 1 章では、エレウシス密儀、ディオニュソス密儀、イシス＝オシリス密儀、ミトラス密儀など古代密儀宗教が、一定の規模の聖職者集団に支えられた祭儀に参加してある種の宗教的経験を得ること、「死の試練」を含む一連の非公開の試練を通して最終的にそれぞれの密儀が約束する秘義に到達することが目標になっていることを検証した。また、キリスト教が覇権をにぎるとともに古代密儀宗教の重要な理念である神霊（ダイモン）が悪霊（ディーモン）に変容していったにもかかわらず、その意味内容はヨーロッパ文化の深層へと沈み込んでいき、その後ヨーロッパ神秘思想の形成に大きな影響を与えることになることと論じた。

第 2 章では、古代密儀宗教の神霊は 17 世紀初頭の薔薇十字啓蒙運動の流れのなかで錬金術的思考法として復活し、「創世記」の冒頭で記述される天地創造のプロセスが「錬金術的な化学過程」として解釈されるようになり、人間が自然探究を通して自己神化に至る能力をもつという信念に行きつくまでの過程を跡付けた。

第 3 章では、宇宙創造に関する秘鍵を解き明かし、それを人間の手によって

操作するという薔薇十字錬金術的な思考法が王立協会を經由して、やがて近代自然科学へと脱皮していくこと、物質あるいは金属からプネウマを抽出する技術としての錬金術は自然科学の飛躍的な発展とともに内面化していかざるをえず、文学における創造原理として受け継がれていくことを論じた。ロマン主義詩人たちが詩学の中心においた想像力という理念は、人間と自然の「精神的な交流のなかで自由と生の喜びを回復する」ための原理として位置付けることができる。「万物は唯一の神性の展開したもの」と見るロマン主義的想像力は、天地創造の秘鍵を探究する錬金術（薔薇十字錬金術）と根底において共通するものがあり、その意味で錬金術的思考法が詩学に変容していると解釈することができる。

第4章では、近代における代表的な秘義共同体としてのフリーメイソン運動は、ステレオタイプ化した俗説とは異なり、18世紀的な人間の理性的・道徳的完成という目標を標榜する進歩的結社であり、目標を達成するプロセスとして古代密儀宗教の形式を換骨奪胎しながら利用しているという点において「倒立した古代密儀宗教」と読み替えることができること、フリーメイソンに象徴される啓蒙主義的な思潮はフランス革命および恐怖政治の失敗を契機にして内面化していき、その過程でロマン主義文学が形成されると論じた。

第5章は、次の三つの各論から成る。

第1節では、W・ブレイクの代表的な銅版画『日の老いたる者』を読み解く視点について、聖書、『失樂園』、「預言書」（と呼ばれるブレイクの幻想的な詩作品群）などの文脈以外に、フリーメイソンの解釈が可能であると指摘した。

第2節では、初期のブレイクが想像力に代わる用語として使用していた「詩魂（ジーニアス）」が、第1章で指摘した古代密儀宗教の神霊に繋がる意味内容をもち、人間と自然の神的な創造原理と位置付けられていることを論証した。

第3節では、ブレイクがその図版を彫版したローマ時代のカメオ細工の傑作「ポートルランド・ヴァーズ」（大英博物館所蔵）の主題が1790年代にはエレウシス密儀と結びつけて一般には理解されていたことを論じた。

第6章では、難解で知られるブレイクの長詩『イエルサレム』を古代密儀宗教の文脈で読み解くことができることを提起した。この場合の密儀宗教とは、18世紀の考古学者W・ステュークリーが復原したドルイディズムである。イギリス国教会の牧師でもあったステュークリーは、「最古の宗教としての族長の宗教」がキリスト教そのものであり、その正統はカトリック教会ではなくイギリス国教会に継承されていると主張し、イギリスの巨石文化およびドルイディズムをその文脈に位置付けている。『イエルサレム』の構造を読み解くためには、現在では忘れられてしまったこうした古代史観が不可欠であることを、特にプレート27の精密な分析によって明らかにした。

第7章では、最後のロマン主義詩人といわれ、ブレイクの影響も強く受けたW・B・イエイツの詩学が西洋魔術の系譜に位置付けられることを、古代魔術から薔薇十字錬金術、そしてイエイツ自身も参加した19世紀末の「黄金の夜明け」教団との関係を中心に論じた。

以上のように、『フリーメイソンと錬金術』は6年以上の期間にわたって執筆された論文の集成であるが、18世紀後半におけるロマン主義の中心理念としての詩的想像力が美学的機能だけではなく宗教的機能も併せもつことを、古代密儀宗教に始まる西洋神秘思想の系譜に位置付けることにより検証するという一貫した目的に基づいて執筆し、構成したものである。

今後の課題は、ロマン主義以降の19世紀から20世紀にかけての時代における西洋神秘思想の形態を宗教共同体主義の視点から再検討することにあるが、その端緒はすでに、平成13年～平成14年度の科学研究費補助金による研究成果報告書『ユートピア都市共同体の形成とその宗教的メカニズム』（平成15年2月、全53頁）において拓いている。